居住環境調整工学実験（第８回目）［水曜日・14:30～17:40・設備システム実験室ほか］
2003.11.219
環境共生学部・居住環境学専攻
助教授・辻原万規彦

音環境の測定のレポートについて

今回は，前回に比べるとかなり良いできのように思いました。特に，前半部分の方法や結果の表示の所は，必要かつ十分な記述のように思います。あとは，考察部分の充実を図れば，もっと良いレポートに仕上がると思います。ただ，やはり幾つかの点では，問題があるところもありましたので，下記に挙げておきます。今後，気を付けてレポートを作成してください。

1）平面図などには，できるだけ寸法や方位を入れること。
2）「図より」ではなく，「図１より」などのように，参照する図を明確に。
3）等価騒音レベルの計算式ぐらいは，書いておきましょう。どこまでをレポートに書けばいいのかの判断は難しいですが，自分が新しく学んだことは積極的に書いておくと良いでしょう。
4）実験の方法は，自分たちが行ったとおりに書くようにしましょう。
5）図や表が，まだ見にくい人がいました。ソフト上の制約もあると思いますが，見やすくなるように努力してください。
6）教科書 p.177～の音の距離減衰の項目なども参考にしながら，考察をしてください。
7）単なる感想と，何か根拠がある推測は，一緒にしないで，分けて書きましょう。例えば，考察の欄で，「～と思う」と書くよりも「～と考えられる」と書いた方が，より感想ではないように感じられます。
8）単位を書くのを忘れないでください。いつも言っていますが，未だに書き忘れたひとがいました。
9）測定結果は，配布プリント p.26 の上の４つのグラフなどとも比較してみましょう。
10）相変わらず，評価基準などの出典を明記していない人が見られました。今取り組んでいる実験では，レポートを読む教員も事情がわかっているから大丈夫ですが，卒業論文などでは，必須です。きちんと出典を書きましょう。
11）算出した指標に応じた，適切な評価基準を適用しましょう。配付資料 46 ページの表９-３などは，50%時間率騒音レベルに用いる基準ではなく，等価騒音レベルに用いる基準です。50%時間率騒音レベルを用いて評価する場合は，それに見合った表や基準を用いましょう
12）できるかぎり様々な文献などにあたって，測定結果を様々な角度から検討してみましょう。
13）段落の最初は，一字ぶん下げましょう。そのためには，「インデント」や「タブ」などの機能を上手に使いこなしましょう。